

丸山直文インタビュー 2018.06 東京のアトリエにて

—————「ラスコーと天気」というタイトルに込めた思いを一言いただけますか。

ラスコーという絵の具を今使っていて、そのラスコーという絵の具がいいとって買ったときに、ラスコーの壁画をふと思い出して、2万年前のものと、今自分が使っている既製品の絵の具という、その距離というか、それはおもしろいなと思ったので。2つの意味。今自分が使っているということと、すごい距離のあるものとして、ラスコーというのと。

ウェザーというのは、自分が物を描いているときに、自分が物を描いているというよりは、そこに至るというか、真ん中にある、それをつないでいる、ここのものを描いているような感じがあるんですよね。自分の描き方もそうだけれども、綿布に水を敷いて描くときに、間に水が入ることが自分にとってすごく大きくて。ウェザーというのも、天気、雨が降ったり、雪が降ったり、晴れたりとかで物の見方が変わったりするじゃないですか、そんな感じ。それは、ただ単に天候だけじゃなく、時代だったり、情報だったり。いわゆるすぐ対象じゃなくて、間にあるものとしてウェザーということ。

—————ラスコーそのものに思い入れはありますか。

今、絵画というのはかなりやばい時代だという感じがするんですよね。商品としては売れるかもしれないけれども、アートとしての力は落ちてきている感じがして、だけれども、ずっと描いているという歴史があるわけじゃないですか。なぜ描くんだろうとか、なぜ描いたんだろうとか。

結局、ラスコーの壁画とか、ああいう壁画だって、いまだによく意味がわかっていないらしいんですよね。獲物がとれるから描いたとか、かなり洞窟の奥に描いていて、誰も見る人がいない、見られないのに描いている。わざわざ、綱で洞穴の奥へ入って、たいまつか何かを持って描いていて、誰のために描いているのかとか、それはある種の祈りなのかもしれないし、何なのかわからない。

いまだによくわからない、そのなぜ描いたかということに対してのおもしろさを考えることと、ある種の芸術としての絵画が終わりかけているような感じ、風潮についてと両方あるのかもしれないですね。

—————芸術としての絵画が終わりかけているような時代の風潮の中で「一人のペインターとして何をするのか」という思いはあるのでしょうか。

絵画の読み方、解釈の仕方というのをつくっていかないという感じはしますよね。もちろんいろいろ読まれ方というのはしているんだろうけれども、まだ本当に読み尽くしているのか、いろいろな可能性、絵の中の物語を引っ張り出すというか。時代が変われば、当然読み方も変わってくるだろうから、なぜ人が絵を描くのかというのがいまだによくわからないのであれば、まだいろいろ引き出しはあるん

だろうという気もしますけれどもね。自分なりに解釈をしてみたいというのがありますよね。

————丸山さんの描き方は水を利用しています。水というものが制作において及ぼす役割や働きをどのように捉えていますか。

綿布で描いていったときに、綿布だから、油だとまずいのでアクリルで描いていて、水を使いますよね。水で滲んで広がっていくときに、自分がついた痕跡がすごい嫌だったんだけれども、自由になれるような気がしたんですよね。わっと広がって自分から解放されていくようなという感じと、けれども同時に、あまりにもそれがなり過ぎると、不安をすごく感じるし、自分にとって、水というのはアンビバレント(両義的)な感じで、自由を与えてくれるものでもあり、すごく不自由なものでもある感じがしますよね。

————今回の展覧会の中では、ほぼ一定にグレーの色が使われています。この色の選択については、どのような考えから選んだものですか。

グレーにしたのは、ある意味、偶然もあるんでしょうけれども、僕というのは大体色をすごく使うんだけど、色は自分の1つの武器だとも思っていたし。物事を整理して、水の役割というのは何だろうといったときに、物事を整理していく段階で、色彩はこっちに置いておこうと思ったんですよね。グレーという色になったときに、黒だと、それこそ白黒じゃないけれどもみたいな感じがするんですよね。白と黒だと象徴的な感じがするけれども、グレーというのは、何の象徴もしないような感じがする。

このグレーというのは全部同じグレーなんですね。それも、ラスコーの絵の具の中で、ちょうど真ん中のグレーで。ある意味、さっき言ったことに似ているのかもしれないですね、白でもない、黒でもないということ。

————絵を描いている時間と絵の中の世界で流れている時間には関係がありますか。

関係あると思いますね。前は関係をないようにしようと思っていたし、ないだろうと思っていたけれども、結構関係があると思うし、今は関係があっていいなと、それでいいやと思います。そういう自分とか、失敗を前は絶対許さなかったけれども、今は失敗しても、そこから何かしようとか、そっちのほうで豊かだろうみたいなふうに考え方が変わってきた。若いころは、失敗は絶対だめだみたいな考え。

絵とは違うところでも、失敗を許せるようになってきたから、絵の中でも失敗を許せるというか。失敗が失敗だと思うことというのは、あるこの考えとこれは違うから失敗だと思うんだけれども、この考えがそんなに強いのかということもあるね。ここに行ったとき、この考えをちょっとずらせば全然失敗じゃないとか、そういうことってあるのに、これだけみたいな感じで。今もそういうところがあるけれども、そういう感じはある。もっとちゃんとリラックスしてやりましようみたくてなってきたのかもしれない。